

羅針盤

新学習指導要領の趣旨を踏まえた学習評価

「指導したことを評価し、評価したことは指導に生かしていく」と言われます。これまで以上に重視されている「指導と評価の一体化」について、国立教育政策研究所が作成した「学習評価の在り方ハンドブック」等を参考にし、確認していきましょう。



小・中学校編



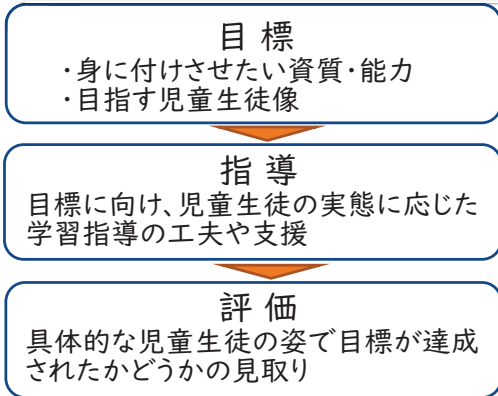
高等学校編

「学習評価の在り方ハンドブック」のダウンロードはこちら



指導と評価の一体化

《指導と評価の一体化のイメージ》



- ◆ 次の指導に生かす「教師の授業改善」
- ◆ 次の学習に生かす「児童生徒の学習改善」

目標とする資質・能力が身に付いているかを見取る

「主体的・対話的で深い学び」の実現により、資質・能力を育成するためにも、教師は学習状況を的確に捉え、教師自身の授業改善や児童生徒の学習改善に生かすことが求められます。

「指導と評価の一体化」を図ることで、評価が指導や学習改善へ結びつき、各教科等の目標の実現につながります。

学習評価の基本構造 「評価の3観点」

《基本的な構造》

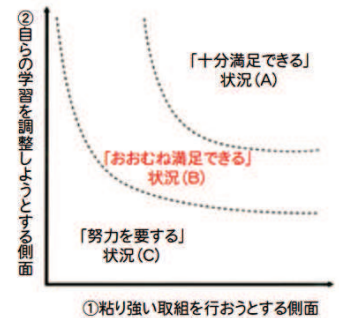


- ◆ 学習評価は、学習指導要領に示す目標や内容に照らして学習状況を評価するもので、目標に準拠する

「感性・思いやりなど」

観点別評価状況の評価や評定になじまない「感性、思いやりなど」については、児童生徒一人一人の良い点や可能性、進歩の状況等を「個人内評価」として見取ります。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価イメージ



「主体的に学習に取り組む態度」の評価

この観点の評価については、①知識及び技能を習得したり、思考力、判断力、表現力を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面と②その粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面、という2つの側面から評価します。

「指導に生かす評価」と「記録に残す評価」

実際の指導・評価での取組

毎時間全児童生徒の学習状況を記録に残すことは難しく、現実的ではありません。そこで、「指導に生かす評価」を毎時間行い、児童生徒の学習状況を見取り、つまずきの確かな解消を図ることに重点を置きましょう。そして、児童生徒の達成状況を見取る「記録に残す評価」の場面を精選し、計画的に位置づけることが重要です。

- ◆ 「指導に生かす評価」は毎時間行う
- ◆ 「記録に残す評価」は単元(題材)の中で計画的に行う

指導と評価の計画イメージ

時間	1	2	3	4	...
学習活動	○○○	◇◇◇	□□□	△△△	...
重点	知	思	知	態	...
記録			○		...

空欄は、指導に生かす評価。○は、記録に残す評価を表しています。

ここからは、岡山県総合教育センターが作成した「新学習指導要領の趣旨を踏まえた学習評価」をもとに、「観点別学習状況の評価」と「評定への総括」について確認していきましょう。ダウンロードも可能です。



「新学習指導要領の趣旨を踏まえた学習評価」のダウンロードはこちら



「観点別学習状況の評価」と「評定への総括」

- ◆ 評価規準を作成し、観点ごとに「おおむね満足できる」状況(B)、「努力を要する」状況(C)かを判断する
そして、質的な高まりや深まりから「十分満足できる」状況(A)を判断する
- ◆ 評定への総括は、**各学校であらかじめ決めておき**、A、B、Cの数値化や組み合わせにより行う

信頼される評価・評定のために

指導要領に示された内容をもとに、児童生徒を評価する時の実現状況を設定し、評価規準を作成します。総括的評価は、各学校で総括の考え方や方法等の協議をして、共通理解を図っていくことが重要です。評定は、小学校が3段階、中学校が5段階です。評定への総括においても、学校全体で共通理解を図る必要があります。

《単元(題材)における「観点別評価」の総括の例》

《例1》評価結果のA、B、Cを数値で表し、達成度で決める方法

(全6時間の場合)

A	B	C
3点	2点	1点

学習活動	1	2	3	4	5	6	総括	単元の評価
知識・技能	3点			3点	2点		8/9点→89%	A
思考・判断・表現			2点			3点	5/6点→83%	A
主体的に学習に取り組む態度		2点		2点		3点	7/9点→78%	B

※判定基準の根拠例

例えば、AとBが同数の場合、割合は約83%となります。また、BとCが同数の場合、割合は50%となります。評価の回数が増えても、この割合は変化しないので、このように基準を設定しました。

観点別評価	A	B	C
観点別の達成度	83%以上	82~51%	50%以下

Point

各学校で評価方法を検討して、共通認識の中で進めていくことが大切です。

《例2》評価結果のA、B、Cの数で決める方法

→評価結果のA、B、Cの数が多いものを、その観点の評価結果とする方法

※留意点

「A B」のように同数の場合や「A B C」のように混在する場合は、あらかじめ総括の仕方を決めておくことが必要です。

学習活動	1	2	3	4	5	6	単元の評価
知識・技能	A			A	B		A
思考・判断・表現			B			A	A
主体的に学習に取り組む態度				B		B	B

《学年末における「評定」への総括の例》

《例1》観点別学習状況の評価を数値化し、合計値で決める方法

観点別評価	合計値	評定(小学校)	評定(中学校)
AAA	9	3	5 または 4
AAB	8		
ABB	7	2	3
AAC			
ABC			
BBB			
BBC	5	1	2 または 1
ACC			
BCC	4		
CCC	3		

A	B	C
3点	2点	1点

Point

懇談や通知表等で、児童生徒や保護者へ評価に関する仕組みや評価結果について、丁寧に説明しましょう。説明をして理解を図ることが信頼性の向上の視点からも重要です。

《例2》観点別学習状況の各観点の評価結果を点数で算出し、それを各合計値の満点に対する割合で、評定に算出する方法

観点別の達成度	83%以上	82~51%	50%以下
小学校	3	2	1
中学校	5 または 4	3	2 または 1